

「ねえこつち見てよ」

私がそう言うと、彼は私の方にゆっくりと顔を向けた。私は彼の目を見た。彼も私の目を見た。彼と目が合っているはずなのに、私の見ているのは彼の目のはずなのに、私には彼がそこにいないような気がした。それはたぶん気のせいではない。

「ねえ、あなたはどこにいるの？」

になつて、明日は掴めなくて……。そんなことを思い出した。

さびれた駅のホームに立つているのは、私と彼の二人だけだった。冷たい風が吹いた。私の頬を切り裂こうとしているようだ。そんな冷たい風だった。

私は視線を落として、プラットホームに引かれた白い線を見つめた。線の向こう側とこちら側。私は向こう側で、彼はこちら側。私は彼の隣に立っている。だけど、私はこちら側にいてはいけなくて、向こう側にいなければいけない人間なのだ。

「私もこつちにいたいんだけど」

そう呟いた。

「だめだよ」

彼がそう言った。

私は彼の方に顔を向けた。彼は私の方を見てはいなかつた。

「どうして？」

「どうしても」

「どうしてなの？」

「どうしてもだよ」

私はそう言つてほしかつたのに、彼は黙つていた。ただ、困つた

ように笑つてゐるだけだつた。

電車はいつ来るのかわからなかつた。どこに向かう電車なのかさえわからなかつた。そもそも、私はどこへ向かいたいのかもわからなかつた。いや、行くべき場所はある。行きたいところもある。でもそこは、行きたくはない場所で、行つてはいけないところなのだ。頭ではわかっている。

「ユキ」

彼が私の名前を呼んだ。

「泣かないでよ」

いつの間にか私は泣いていたらしい。いつもだつたら彼はすぐにもハンカチを取り出し、そつと私に渡してくれるのに、今の彼はやつぱり困り顔で笑つてゐるだけだつた。

「ハンカチ貸して」

私はそう言つた。彼へのいじわるだつた。言つた後に自分の性格の悪さを少し後悔した。

「ごめんね」

「私は私から顔を背けた。

「今日は持つてないんだ」

私は知つていて。彼は外出するときにハンカチを忘れることがない。今だつて彼のズボンのポケットにはハンカチが入つていて、違ひないのだ。

今日は、といふ彼の言葉が淋しかつた。

「そういえばさ」

私は指で涙を拭つた。

「私たちが出会つたきつかけもハンカチだつたね」

私も彼の方から目を背けて言つた。

「君が落としたハンカチを」

「あなたが拾つた」

そう、彼と出会つたきつかけは私が落としたハンカチで、それは別れるきつかけで。

「ねえ」

「何？」

「運命つて信じる？」

「あなたは？」

「僕は」

遠くから電車が近づいてくる音が聞こえる。

「僕は信じてる。君と巡り合つたことも運命だと思う。そして今、君と別れなくちやいけないことも」

まつすぐにのびる線路の先の方に電車が小さく見える。

「ねえ」

「ん？」

私が呼ぶと彼はこつちを向いた。

「嫌、なんだけど」

「何が？」

「別れるの」

「そつか」

電車はどんどん近づいてくる。

「今なら間に合うね」

私は泣きそうになるのを必死に堪えて、なんとかして笑おうとしたが、彼にそう言つた。きっと、とても醜い顔だつたと思う。とてもとても醜い顔だつたと思う。

「一緒に行く？」

彼はそう私に聞いた。それは、とても醜い顔だつた。醜くて、とても愛おしい顔だつた。

「でもね」

彼の目は濡れていた。

「僕にはもう明日は来ないけど、君には明日が来るんだから」

風に飛ばされた私のハンカチを追いかけた彼はもう戻らない。そう、わかつていたのだ。わかりたくないだけなのだ。

「ユキ、目を閉じて」

私は目を閉じた。瞼の裏にはいろんな彼がいた。彼の唇が触れた

気がした。それはたぶん気のせいだろう。

私は目を開けた。彼はそこにいた。いないけどいた。

電車がホームに入ってきた。電車の扉が開く。

「さあ、電車に乗って。ユキ、お別れだよ」

私は彼のその言葉にあらがうことは出来ず、電車に乗り込んだ。

電車とホームとの隙間、小さい子の足が挟まってしまうかしまわないかといった、そんな小さな隙間が私と彼の間を隔てた。それが、私と彼の差。私と彼の違い。一緒にいられない理由。

「私は怖い」

「何が？」

「あなたが消えてしまうことが」

「それじゃあさ」

彼はもう泣いていなかつた。本当は最初から泣いていなかつたのかもしれない。私が、彼に泣いてほしかつただけかもしれない。

「僕がいた痕を君に残すよ」

言葉はナイフだ。そう彼は言つた。

「ユキ」

彼はにこつと笑つた。

「大好きだよ」

ピーという発車の合図の後、電車の扉が閉まつた。

電車が走りだす。彼がどんどん小さくなっていく。彼は笑つてゐるような、それでいて泣いているような、そんな顔で私の方をずっと見ていた。彼の唇が動いて、私に何か伝えようとしているのがわ

かつた。私が、そして彼が旅立つたために、二人の今を過去に変えるために、彼が胸の内に隠していた思いが、彼の唇から溢れていた。

彼の姿が見えなくなつてしまつた時、私はその場にうずくまつた。

涙が溢れてきた。

私の頬には、一筋の赤い線が入つていた。そこから流れ出した血は頬から顎へと流れ、それは私の涙と混じり、ぽとりと電車の床に落ちた。一粒、二粒、三粒。

こんなにも誰かを好きになる日が来るなんて思つていなかつたのだ。それが、頬の傷になつた。

この傷もいつかは治つてしまふかもしれない。頬からは痛みがなくなり、傷跡もなくなるかもしれない。それでも、私は痛かつたことを覚えているだろう。涙と血が混ざつた、この色を忘れないだろう。

電車のアナウンスが行先を告げる。いつ到着するかわからないその行先は確かに私の前にある。掴めるかわからないけど、それでも先へ進まなければならない。

彼に言えなかつた言葉を私は抱いたままで、さよならという一言を私は抱いたままで、そんな私を優しく抱いて、電車はいつまでも走り続けるのだ。